

分析報告書

-卒業生アンケート分析-

要旨

2025 年度卒業生を対象に実施した卒業生アンケートを使用し、大学満足度、学部満足度、推奨意向、身に付けたスキル、大学への要望、自由記述についてそれぞれ分析をおこなった。その結果、大学満足度と学部満足度はともに高水準を示し、両者と推奨意向の間に有意な正の関連が確認された。また、自由記述分析から、学生の学びの実態を反映した 4 つの学生の類型を抽出できた。

はじめに

本学では、卒業生の学修成果や大学生活の総括を把握するため、2019 年度より卒業生アンケートを毎年実施している。同アンケートは、大学満足度、学部満足度、推奨意向、身に付けたスキル、大学への要望、自由記述の 6 問から構成されている。本報告書では、2025 年度卒業生を対象に、各項目の集計結果に加え、満足度や推奨意向の関係性分析、学部や所属ゼミ別の比較、自由記述のクラスター分析をおこない、卒業生の学びと大学生活の実態を明らかにした。

1.集計結果

1.1 回答日、回答時間帯

最初にアンケートの回答日、回答時間帯を集計した。その結果、最も回答した人数が多かった日は、卒業式で 19.6%であった。次いで、秋学期授業最終日が 14.0%、その前日が 7.5%、そして卒業判定日が 5.2%の順に多かった。なお、2025 年の最終授業日も 3.6%の回答が行われた。次に、回答した時間帯を集計した。その結果、最も多かった時間帯は 9 時から 12 時 10 分の間で 36.2%、次に、13 時から 16 時 10 分の間で 22.2%、19 時から 24 時までが 17.1%となった。昼休みの時間帯の 12 時 11 分から 13 時の間では 2.8%となり、回答の多くが授業の時間内であった。

1.2 学部別、コース専攻別

回答者の所属する学部とコース専攻別の内訳を示す。まず、学部別では、商学部 43%、経営学部 41%、人間科学部 16%となった。次いで、コース専攻別では、商学部のマーケティング

イングコース 27%、同学部金融コース 2%、同学部会計コース 13%。経営学部の企業経営コース 26%、同学部経営法務コース 3%、同学部起業・事業承継コース 3%、同学部情報コース 10%。人間科学部の社会・ライフデザインコース 4%、同学部心理・コミュニケーションコース 11%、同学部児童教育専攻 1%となった。

1.3 大学満足度

大学満足度（「現時点で、高千穂大学に対してどの程度満足したと感じていますか。」）の回答の集計結果を示す。この項目は 5 件法で満足、やや満足、どちらともいえない、やや不満、不満の 5 段階から一つを回答するものとなっている。回答の結果は、満足 48.8%（昨年対比+14.8 ポイント）、やや満足 37.7%（昨年対比▲4.3 ポイント）、どちらともいえない 10.9%（昨年対比▲7.1 ポイント）、やや不満 1.8%（昨年対比▲2.2 ポイント）、不満 0.8%（昨年対比▲1.2 ポイント）となり、平均値は 4.32 点であった。昨年と比べて、満足度が大幅に上昇し、反比例して他の項目が減少した結果となった。満足とやや満足の TOP2 の項目を集計すると、86.5%となった。

1.4 学部満足度

学部満足度（「現時点で、卒業学部に対してどの程度満足したと感じていますか。」）の回答の集計結果を示す。この項目も 5 件法で満足、やや満足、どちらともいえない、やや不満、不満の 5 段階から一つを回答するものとなっている。回答の結果は、満足 51.7%（昨年対比+10.7 ポイント）、やや満足 37.7%（昨年対比▲0.3 ポイント）、どちらともいえない 9%（昨年対比▲9 ポイント）、やや不満 1.3%（昨年対比▲0.7 ポイント）、不満 0.3%（昨年対比▲0.7 ポイント）となり、平均値は、4.39 点であった。こちらも大学満足と同様に、昨年と比べて、満足が大幅に上昇し、反比例して他の項目が減少した結果となった。満足とやや満足の TOP2 の項目を集計すると、89.4%となった。

1.5 推奨意向

他者への推奨意向（「大学進学希望者がいる場合、高千穂大学を勧めたいと思いますか。」）の回答の集計結果を示す。この項目も 5 件法で勧めたい、やや勧めたい、どちらともいえない、あまり勧めたくない、勧めたくないの 5 段階から一つを回答するものとなっている。回答の結果は、勧めたい 28.2%（2022 年対比+12.2 ポイント）、やや勧めたい 33.9%（2022 年対比▲1.1 ポイント）、どちらともいえない 31.3%（2022 年対比▲8.7 ポイント）、あまり勧めたくない 4.4%（2022 年対比▲0.6 ポイント）、勧めたくない 2.3%（2022 年対比▲1.7 ポイント）となり、平均値は、3.81 点であった。こちらも大学満足と学部満足と同様に、2022 年と比べて、勧めたいが大幅に上昇し、反比例して他の項目が減少した結果となった。なお、比較を 2022 年としているのは、前回この設問が使用されたのが当該年度であったためである。

1.6 ゼミ所属

ゼミ所属の有無の集計結果を示す。その結果、ゼミに所属していたのは 66%、未所属だったのは 34%であった。ゼミの所属者の方が未所属者と比べて約 2 倍の開きとなった。また、このデータを学部別で集計した。その結果、商学部の回答者の内、ゼミ所属 73.3%、未所属 26.6%。経営学部の回答者の内、ゼミ所属 65.4%、未所属 34.5%。人間科学部の回答者の内、ゼミ所属 46%、未所属 53.9%となった。次いで、コース専攻別に集計したところ、商学部のマーケティングコースでゼミ所属 67.9%、未所属 32%。金融コースでゼミ所属 88.8%、未所属 11.1%。会計コースでゼミ所属 82%、未所属 18%。経営学部の企業経営コースでゼミ所属 63%、未所属 37%。経営法務コースでゼミ所属 30%、未所属 70%。起業・事業承継コースでゼミ所属 90%、未所属 10%。情報コースでゼミ所属 74.3%、未所属 25.6%。人間科学部の社会・ライフデザインコースでゼミ所属 28.5%、未所属 71.4%。心理・コミュニケーションでゼミ所属 46.5%、未所属 53.4%。児童教育専攻でゼミ所属 83.3%、未所属 16.6%となった。

1.7 身に付いたスキル

身に付いたスキル（大学の授業などで、どのような力を身につけることができましたか（複数回答可））の集計結果を示す。この項目は、こちらが用意した選択肢のなかで、卒業生が該当したと思うものを選択・回答するものである。よって 1 人の回答者が複数の選択肢を選ぶことがあるため、回答者の人数と回答された選択肢の数が一致しないものである。集計の結果、1 人平均 2.53 の選択肢が選択・回答された結果となった。回答された選択肢は多い順に、1 位コミュニケーション力 22.2%、2 位一般的な教養 20.8%、3 位専門性 15.8%、4 位課題発見・解決能力 14.7%、5 位チームワーク力 14.6%の順となった。

1.8 大学への要望

大学への要望（「高千穂大学がさらに充実すべき点は何だと思いますか（複数回答可）」）の集計結果を示す。この項目は、1.7 身に付いたスキルの項目と同様に、こちらが用意した選択肢のなかで、卒業生が該当したと思うものを選択・回答するものである。よって 1 人の回答者が複数の選択肢を選ぶことがあるため、回答者の人数と回答された選択肢の数が一致しないものである。集計の結果、1 人平均 1.82 の選択肢が選択・回答された結果となった。回答された選択肢は多い順に、1 位専門教育 19.7%、2 位コンピュータ教育 17.1%、3 位施設・設備 16.9%、4 位外国語教育 14.2%の順となった。

1.9 高千穂大学でできたことは何ですか（自由記述）

自由記述（「高千穂大学でできたことは何ですか（記述回答）」）の集計結果を示す。この項目は、必須のものではなく、任意のものであるため、回答者全員が記入するとは限らない。記述し

た人数、キーワード、内容の分類（極性分析＜ポジティブ、ニュートラル、ネガティブ＞）を集計した。まず、記述した割合は全体の 55%であった。学部別に内訳を見ると、商学部（記述あり 57.6%、記述なし 42.4%）、経営学部（記述あり 53.5%、記述なし 46.5%）、人間科学部（記述あり 52.4%、記述なし 47.6%）となった。次に、記述のなかで、出現したキーワードを集計した。

キーワードの集計については、一人の回答者が複数キーワードを記入しているため、回答者の人数ではなく、提出されたキーワードを数えているため、回答者数よりもキーワード数が多くなる。集計の結果、出現件数の多い順にトップ 10 のキーワードを示すと、①ゼミ、②専門・活動、③知識、④コミュニケーション、⑤能力、⑥友達・ゼミ発表、⑦研究、⑧経験・就職の順となった。最後に、自由記述に対して極性分析をおこなった。極性分析は、一人の回答内容が、肯定的（ポジティブ）、否定的（ネガティブ）、中立（ニュートラル：判別不明含む）に分類するもので、分類された数と記述ありの数が一致する。分類の結果、ポジティブ判定 59.2%、ニュートラル判定 40.8%、ネガティブ判定 0%となった。ポジティブ記述の具体例としては、「大人数の前でのプレゼン能力」「自分自身成長ができた」「様々な学びを得ることができた」「リーダーシップを鍛えられた」「チームワークを高められた」「経営について多く学べ、資格なども取りやすい環境だった」「教員免許を取得することができた」などが挙げられる。

2. 変数間の関係性

2.1 大学満足、学部満足、推奨意向の関係性分析

変数間の関係性を検討するため、相関分析をおこなった。大学満足度と学部満足度の間に $r=.75$ ($p<.001$) という強い正の相関、大学満足度と推奨意向の間に $r=.635$ ($p<.001$)、学部満足度と推奨意向の間に $r=.563$ ($p<.001$) の正の相関が確認できた。次に、3 つの変数間における主効果と交互作用を分析した。まず、主効果については、大学満足度に対する説明率は $R^2=.670$ ($p<.001$) であり、説明変数として学部満足度 ($B=.626$ ($p<.001$))、推奨意向 ($B=.239$ ($p<.001$))、スキル未修得 ($B=-.464$ ($p<.001$)) となり、スキルの未修得が負で有意を示した。次に、学部満足度に対しては $R^2=.614$ ($p<.001$) であり、大学満足度 ($B=.607$ ($p<.001$))、推奨意向 ($B=.099$ ($p<.01$))、コミュニケーション力 ($B=.134$ ($p<.05$))、専門性 ($B=.115$ ($p<.05$))、国際的な視野 ($B=-.187$ ($p<.05$)) となり、国際的な視野が負で有意を示した。最後に、推奨意向に対しては $R^2=.474$ ($p<.001$) であり、大学満足度 ($B=.567$ ($p<.001$))、学部満足度 ($B=.240$ ($p<.01$))、一般教養 ($B=.154$ ($p<.05$))、ゼミ所属 ($B=-.204$ ($p<.05$)) となり、ゼミ所属が負で有意を示した。次に、3 つの変数に対する交互作用を分析した。その結果、大学満足度の説明率は $R^2=.737$ ($p<.001$) であり、交互作用で抽出された説明変数は、「国際的な視野×専門性」($B=.571$ ($p<.05$))、「ゼミ所属×道徳心」($B=.558$ ($p<.05$))、「チームワーク×資格」($B=.546$ ($p<.05$))、「一般教養×道徳心」($B=.543$ ($p<.05$)) となり、いずれも正の有意を示した。学部満足度の説明率は $R^2=.709$ ($p<.001$) であり、交互作用で抽出された説明変数は、「ゼミ所属×道徳心」($B=.556$ ($p<.05$))、「一般教養×道徳心」($B=.514$ ($p<.05$))、「コミュニケーション能力×道

徳心」($B=.510$ ($p<.05$)) となり、いずれも正の有意を示した。

2.2 学部別、コース専攻別と各指標の関係

学部別と大学満足度・学部満足度・推奨意向との関係性を検討した結果、学部満足度において学部間に有意差が確認できた。次に、コース専攻別との関係では、学部満足度において企業経営コースと心理・コミュニケーションコースの間でのみ傾向差 ($p=.08$ †) が認められた。

2.3 ゼミ所属と各指標・スキル・要望の関係

ゼミ所属の有無によって、大学満足度、学部満足度、推奨意向に差があるかについて検定をおこなった。その結果、2つの満足度については差が表れなかったものの、推奨意向については差が表れた。ゼミ未所属の方が、ゼミ所属よりも推奨意向が高まる結果になった (ゼミ未所属 3.97、ゼミ所属 3.72)。次に、ゼミ所属の有無とスキル習得に差があるかを検定した結果、コミュニケーション力 ($p<.05$)、チームワーク力 ($p<.001$)、専門性 ($p<.01$) の3点について、ゼミ所属者がゼミ未所属者よりも有意に高い結果が表れた。

2.4 クラスター分析

自由記述 213 件を対象としてクラスター分析を実施した結果、4つの学生類型を抽出できた。各クラスターの特徴は次の通りである。A：ゼミ探究的学修型 (全体の 27.7%)：記述の中で、「ゼミやゼミ活動、発表、ディスカッション」などが言及されており、「深い学び」と「探究」が軸とされ、研究プロセスを通じた論理的思考力や課題発見・解決力の獲得を強調していた。B：自律的成長型 (全体の 19.9%)：記述の中で、「主体性、行動力、リーダーシップ、自己成長、挑戦、自立」などが言及されており、ゼミ以外での学びの機会や学生生活の活動のなかで、リーダーとしての経験、自己管理、継続力など内発的成長を実感していた。C：実践的社会接続型 (全体の 26.7%)：記述の中で、「資格取得、簿記、教員免許、会計、就職活動、専門知識、インターンなどが言及されており、簿記を含めた資格取得、教職、インターンや就職活動」など「社会で役立つ実力」といった具体的成果を重視し、それを習得した経験を持つ学生である。D：共生的充実型 (全体の 25.7%)：記述の中で、「友人・仲間、部活・サークル、学園祭 (高千穂祭)、思い出、チームワーク、大学生活、多様な人、傾聴力、コミュニケーション力」などのキーワードが言及され、部活・サークルや高千穂祭実行委員会や学友会などの活動の機会の中で「人とのつながり」と「充実した大学生活」を最大の成果として捉えている学生である。

次に、4つのクラスターごとに、大学満足、学部満足、推奨意向、ゼミ所属率の傾向をそれぞれ示す。最も大学満足度が高い傾向にあったのは、Aのゼミ探究的学修型 (90%) であった。次に、学部満足度についても Aのゼミ探究的学修型 (92%) が最も高い結果となった。次に、推奨意向度については、Dの共生的充実型が最も高く 81%であった。最後に、

ゼミ所属率を見ると、最も高いのは A のゼミ探究的学修型（89％）であった。

3. まとめ

本分析の元となった卒業生アンケートは、2025 年度の有効回答率が卒業生数に対して 95.5％となり、過年度と比較して最高値を記録した。この集計の結果、大学満足度（平均 4.32）、学部満足度（平均 4.39）はいずれも高水準を示し、相関分析では大学満足度、学部満足度、推奨意向の 3 者間に有意な正の関連が確認できた。また、卒業生のゼミ所属率は 66％であり、7 コース専攻で所属率が 5 割を超えた。ゼミ所属者は非所属者と比べ、コミュニケーション力、専門性、チームワーク力の習得が有意に高い結果となった。加えて、身に付いたスキルの調査結果では、1 位がコミュニケーション力、2 位が一般的な教養、3 位が専門性の順となった。最後に、自由記述の分析では、自由回答の割合は回答者全体の 55％となり、記述内容の極性分析の結果では、ポジティブ（肯定的）59.2％、ニュートラル（中立的）40.8％、ネガティブ（否定的）0％であった。これらをもとに学生の類型を図るためにクラスター分析をおこなった。その結果、ゼミ活動を軸とする「ゼミ探究的学修型」、自己成長を軸とする「自律的成長型」、資格・就職を軸とする「実践的社会接続型」、人間関係を軸とする「共生的充実型」の 4 類型を抽出できた。

おわりに

本報告書では、①大学満足度と学部満足度はともに高水準を示し、学部満足度が大学満足度、推奨意向へと連鎖する構造が確認できたこと。②ゼミ所属者は非所属者と比べて、コミュニケーション能力等のスキルの習得が高いことを示した。今後は、本報告書で示した知見をもとに、学修環境の充実とゼミ教育の質的向上に向けて、関係委員会・関係部署と連携した取り組みを進めていくことが求められる。